

椎名麟三全集



小説
3

冬
樹
社

椎名麟三全集 3

昭和四十五年十一月三十日初版第一刷発行

著 者——椎名麟三

発行者——高橋直良

発行所——冬樹社 東京都千代田区神田神保町二一八

電話東京二六四一〇三四六 振替東京七七五七

印刷所——三客堂印刷株式会社

製本所——一重製本株式会社

装幀者——桒折久美子

写 真——河出書房新社寫真部

定 価——二〇〇〇円

© Rinzo Shina 1970

0391-02003-5190

第三卷目次

豪雨の後に	3
嫉妬	31
過去	59
福寿荘	77
赤い孤独者	93
ある不幸な報告書	305
死人の家	323
誘惑	333
春の旅	353
骸骨	371
三人	405

小說
3

豪雨の後に

1

昨夜来の豪雨で、中央線が数カ所で不通となり、Kという田舎駅は、足どめを食った旅客たちで、混雑していた。人々は、自分の不幸を呪い、鉄道の脆弱さを呪い、やり場のない腹立たしさで駅員たちに食ってかかっていた。雨は、まだ容赦なく降りつづき、近くに迫っている山際の川は、ここもあふれて、山際から駅裏までの一帯は、一面の洪水となり、数軒の農家をつつむようにして、大きなうねりを立てながら西に向って奔流していた。一軒の納屋が僕たちの見ている前で、崩壊した。しかし何の音もしなかった。水が、その音までのんでしまったという感じであった。重苦しい空から、絶間なく厚い黒雲が、山肌ぞいに何かの巨大な腕のように垂れて来ては、稲を水底にしずめてしまった奔流へなだれ落ちていた。

その駅で、汽車から降された僕は、レインコートを頭からかむって、駅前の大通りを歩いた。鉄道が開通するまで、どこかに宿をとらねばならなかった。駅員からは、開通の見込不明という公式の発表以外には何

も聞けなかったが、しかし二、三日はかかるだろうということだけは鉄道の被害状況から察せられたからである。しかし三軒あるどの旅館も旅客たちがあふれ、玄関の土間にまで、靴やリュックサックに腰を下した人々がひしめき合っていた。僕が、土間の組の仲間入りをしようとすると、それ等の人々は、旅館の人々と共に、まるでノアの箱船へ這い上ろうとした悪魔でもあるかのように口々に僕を拒絶した。仕方なく僕は、雨のなかを歩いた。だが僕は、どうしても宿を見つける決心であった。そして必ず見つけ得るという自信もあった。僕は、この時代の他の人々と同じように、このような非常な事態には馴れていたからである。

駅前の家並が尽きるあたりで、道も忽ち尽きた。水は、ここにもやって来ていて道を蔽い、眼の前の山との間の狭い地帯を、泡立ちながら流れていた。流された橋の一部が、濁流のなかに、心細げに頭を出しているのが見えた。まだ青い柿の実や、生々しい裂け目を見せた木の枝や、おびただしい藁屑や、種々雑多な人間生活の排泄物などが、大通りの上に打ちあげられていた。僕は、家並の端の汚らしい理髪店へとび込んだ。昼飯の仕度らしいかまどの煙が、むせかえるほど店へ立ち込め、五、六人の人々が一方の窓に集って水の方を見ていた。突然なかのひとりが窓から遠くへ向って叫んだ。

「どすけべい！……顔を出世！ 出てきやがれ！」

人々は、どっと笑った。僕は、人々の背後から、彼等の面白がっているものを見た。百米は離れていない濁流のなかに、二坪たらずの小屋が立っていた。ちゃんと瓦で葺いてあるのだが、荒れていて、半ばこわれた水車が、その小屋に打ちつけたようについている。しかし人影は見えない。理髪店の主婦らしい女が、裏から出て来た。かまどのすすで、顔も手も、くたくたの白衣も、きたならしく汚れていた。彼女は、人々へひどく腹立たしそうにいった。

「まだ顔を出さないかい」

みのを着た四十歳位の農夫がのっそりはいって来た。

「安造んところの姪が、淫売してたんだって！ おらあちよつとも知らなかったよ！ 向うの小屋のなかにいるのかい？」

「天罰できめんさ」と主婦は、いまいましそうにいった。「大雨さえ降らなかつたら、誰にも判らなかつたろうによ。天罰できめんだよ。ほんとに新家の水車小屋に男をくわえ込んでいたなんて……」

「相手は誰だい」

「ちらつと先刻、顔見えたけど、知らない顔だよ。大方、旅の者だろうよ」

次第に、村の人々が集って来て、店から大通りにかけて一杯に立ちならびながら、濁流のなかの小さな小屋を眺めていた。その小屋まで簡単に歩いて行けそうだったが、濁流のなかに一間ぐらいの溝がかくされているので、危険で行けないというのであった。この理髪店の主婦の話によると、空襲で焼け出されて疎開して来た森島という女だということだった。彼女は身寄りの安造という按摩をたよって来たのだが、その按摩も中風で去年死に、この村にはひとりの身寄りもなく、小さな納屋を借りて生糸工場のつむぎ女をしながら十五になる子供と暮しているのだという。主婦は、言葉の端々に、この出水よりも眼の前の小屋が我慢出来ない出来事であるかのように、いまいましそうに繰り返した。

「天罰できめんだよ。お客さん。大雨さえ降らなければ、村の衆には知れなかつたらうよ。天罰できめんだよ。これでもうこの村にも居られなくなるだろうよ」

昨夜、駅の待合室から客をひろった女が、小屋へ客を連れ込んでいるうちに、ひどい豪雨に襲われ、出るのをためらって夜をすごしているうちに、突然水にとりまかれたものらしかった。人々は、時々大きな罵声をなげかけた。しかし小屋のなかはひっそりしていた。二、三の村の若い男が、競争で石を投げはじめた。

しかしどの石も、小屋の手前で、力なく落ちた。僕は、これらの人々の様子から、その小屋にとじ込められているという女が、ふだんから村の人々からどんなに取扱われているかということが察せられた。しかし僕には関係のないことだった。それよりも、僕は自分の宿を見つける方が大切だったからである。九月といながら、肌着まで濡れているようで寒かった。僕は、店の主婦に相談した。しかし主婦は、すっかり興奮しており、まるでこの世の一大不祥事でもあるかのように、小屋の方に氣をとられていて、話ののつては呉れなかった。彼女は、会う人々に説きまわった。

「天罰できめんだよ！……大雨さえ降らなけりや、判らなかつたものを。いい気味だよ」

そこへ、十四、五歳の少年が、大きな真新しいたらいを運びこんで来た。そのたらいは、いかにも田舎の職人が誠意をこめてつくつたというような、頑丈で立派なもので、貧弱な少年とひどく不似合だった。その少年は、全く病氣ではないかと思われるほど貧弱な身体をしていただけではなく、老人のような陰気な顔をしていた。つぎはぎだらけのうすよごれた半袖のシャツが、濡れて肌にびったりつき、瘡せたあばら骨をシャツを通して見せていた。パンツを母親のものらしい腰ひもでしめている。森島のがれが来たと声が出た。さすがに老人のひとりが少年をひきとめた。

「それでお前のかあちゃん、連れて来るのかい？ ……危ないからよしな。水がひくまであのまま放つて置いても、飢え死しやあしないよ」

だが少年は、一向老人の言葉を聞こうとせず、だまってパンツを脱ぎはじめた、老人の声に、やっと二、三の人々も、その彼へやめるように忠告した。しかしその彼らの言葉のひびきには、ある冷淡さがあつた。少年は、人々の意見に全く無関心に振舞っていた。それはきびしい主人に用事を命ぜられた奴隷で、誰が何をいおうといまさら、どう変更することも出来ないのだというように見えた。彼は、つぎだらけのうすねず

み色のパンツを脱ぎ、それをたらいのなかに投げ入れると、全裸になったまま水のなかへ入っていった。その少年の顔は、ただ陰気なだけで、それ以上の感情の動きは見られなかった。そして水にうかばせたたらいを引張って歩いてしたが、すぐ深みへ落ちて、流れのなかへ没してしまった。だが手だけはたらいにかかっていた。そのまま彼は、強い流れに忽ち二米ぐらい流された。だがすぐ浮び上って、少しばかり泳いだ。それで、彼は、もう溝のあたりを越えたらしかった。再び彼は、たらいを引張りながら、小屋へたどりつくと、だまって小屋の入口に立っていた。水が彼の膝のあたりまで泡立っていた。

ズボンをたくし上げた男が、頭から黒い上衣をかむり、顔を押しつつむようにして小屋から出て来た。男が、何かいったらしく、少年は首を横に二、三度振った。男は、そのたらいをしばらく試していた。その物腰で、相当の老人らしいことが判った。

「O町の信用組合のひとじゃないかね」と誰かがいった。「よく似ているが、ちがうかなあ」

男は、やっとたらいに乗った。たらいはぐっと沈み、二、三度揺れた。少年は、しばらくそれを見定めてから、たらいを曳いて歩き出した。その様子のなかには、少年の誠実さが強く感じられた。男は、黒い上衣で、頭から顔まで覆ったままで積み重ねたぼろの山のように、たらいのなかにうずくまっていた。ただわずかに人間と思えるのは、頭からかむっている上衣が、夏服のうすい上衣であるらしく、雨に忽ち濡れて、ビリケンのような頭の形をくつきりあらわしていることだけだった。少年は、深みのあるらしいところから泳いだ。しかし、たらいは重く、どんどん川下の方へ流されて行つた。それでもやっと彼の足は地についたらしかった。たらいを人々のいない理髪店の裏の方へ引張って行つた。男は、畠のなかへ降りると、靴をもったまま走るように駅の方へ行つた。誰もその彼を追って、その男が誰であるか、確かめようとするものはなかった。

少年は再び、たらいを小屋まで運んでいった。彼のうすい胸がはげしい息で喘いでいるのはつきり見えた。彼の母親が出て来た。白粉でも塗っているのか、文字通りの白壁のような顔をしながら、じっと僕たちの方を眺めていた。油気もなさそうな髪がきちがいのように乱れている上に、べらべらした人絹らしい着物が、しどけなく膝の上までまくり上げられているので、その姿は、一種異様なものであった。女は、いつまでたってもたらいに入ろうとしなかった。少年は、その母親を見つめたまま同じようにだまってたたずんでいた。

「いい恥さらしだ」とひとりの農夫が、情なさそうな声を出して叫んだ。

いままでだまっていた人々は、再び口々に悪態をつきはじめた。理髪店の入口のあたりで、あの少年は、村では手に負えない手癖の悪い少年であること、この間、畠のとうもろこしを一晚に三十本も盗まれたが、あの少年にちがいないこと、いい加減にあの母親もろともあの少年も駐在所にわたして、この村から追放した方がいいことなどが熱心にささやかわされていた。僕は、急に退屈になって、どうしても今夜の宿をさがさなければならぬという決心を思い出した。僕は、もう一度、窓から、小屋の方を見た。女は、まだ真白な顔で、こちらを眺めながら立ちつくしていた。少年は、やがて母親を運び出すにちがいない。だがこの村での彼女たちの生活は一層困難になるだろうと思えた。しかしそれは、僕の力では、どうすることも出来ないことであつた。そしてどうすることも出来ない以上、この小さな悲惨は、僕にとっては、何のかかわりもないことだつた。僕は、やっと理髪店の主婦をつかまえて、どこかであてくれるところはないか、ともう一度たずねた。主婦は、やっと僕の願いに気がついた風だつた。

「村の恥さらしですよ。お客さん」と彼女は、吐き出すようにいった。「とんでもないものをお見せして。……そうですねえ、うちは駄目だけれど、主家のかいこ部屋がぁいっているから、お世話して呉れるかも知れ

ない。ちょっと行つて来ましょう」

世話して貰つた家は、農家らしくない屋根の低い家だった。庭で、四、五人の若い人々が、腰のあたりまで水につかつたらしい姿で、焚火をしながら、笑い興じていた。彼等も堤防で水を防いでいたのだが、そこから先刻の出来事をすっかり見てしまったのだということが、彼等の笑声から察せられた。しかし彼等は、理髪店の主婦から案内されて来た僕を見ると、うろんな人間を見たともいうようににびたりと話をやめ、猜疑をふくんだ眼でじろじろ僕を見ていた。僕は、自然のなかには見られない異物に対する、岩のような団結をそれらの人々に感じた。あの母と子が、ここで暮すのは、ほんとに容易ではないだろうと、ふと思った。しかしそれだけだった。僕は、すぐに役にも立たないその思いをすてた。

あてがわれた部屋は、ひろい板の間で、拭き込まれて黒光りしていた。家の老人が、厄介そうに畳二枚を運んで来て、そこにならべて呉れた。それっきり、誰も姿を見せなかった。僕は、自分から土間へ下りていて、家の老人を探し出し、蒲団と浴衣を借りた。そして借着の浴衣のままで蒲団のなかへもぐり込んだ。とにかく宿を見つけることの出来たことに、十分な満足を感じながら。

2

雨はすっかりやんでいたが、風が出ていた。強い風だった。近くの山全体が鳴っていた。僕は、やっと起き上った。もう薄暗くなっていた。農家の夕食のおそいことを知っている僕は、昼食もとらなかった飢えを蒲団のなかで、じつと耐えていたのだ。すると僕は、このようにして暮して来た貧しい少年時代のこと、が、身体全体の感覚のなかによみがえって来た。たしかにそのとき僕は、食べるものを待っていたのだ。しかし

僕は、ただそれだけではなく、もっと遠い、もっと痛切な何かを待っていたのだということをぼんやり心のうちに感じていた。何故なら、その飢えに耐えている瞬間に、思い描いていたものは決して食べ物などではなく、もっと非現実な、もっと突飛な事物だった。それはあるときは「かくれみの」であり、あるときは「魔法の杖」であり、あるときは「忍術」であった。そしてそれらは、僕にとって、この地上の法則から超え得た無限の自由を約束しているように思われたのである。しかし四十に近い大人となったいまの僕は、その約束を笑うことは出来る、たしかにそんなものは存在しないからだ。しかし笑う権利が僕にあるかどうかとなると、ずいぶんにあやしいものだとは僕は考えた。

突然、風にのって、どこからかつらそうな悲鳴が、とぎれとぎれに聞えているような気がした。耳をすますと、女ののしる声もそれにまじっている。ひよっとしたら、あの母子の住居が、この近くにあるのかも知れないと僕は思い当った。僕は、同情からでなく、退屈のあまりの単なる好奇心から彼等の住居を見たいと思った。僕は土間へ下りて外に出た。急に奔流の音が、山にこだまして聞え、風の音の強いのは、その音をふくんでいるせいだと知った。

村全体には、あかあかと灯がついていた。まるで祭の夜のような、落着かないざわめきが、村を蔽っていた。僕は、そのざわめきの一つの源である近くの旅館の方を見た。その二階は、明けはなたれて眩しい光を夕闇のなかに投げかけていた。その窓には人々の影が動き、笑い声が間断なく聞えていた。待つことに耐えられない一団が、酒を飲みはじめたものらしい。電燈が消えなかったのは、あの人たちにとって勿怪の幸이었다と僕は思った。真暗なかでは人々は自分の不幸を嘆いているより仕方がなかったにちがいないからだ。僕は、泊っている家の裏道へまわった。びしっ、びしっという、鞭で人をたたいているような音がはじめて聞え、それに少年の悲鳴と女の罵声が始終聞えていた。それらの声は、崩れかかった荒壁の物置小屋か

ら聞えて来るのだということが判った。僕は、少し後ずさりして、見も知らない農家の、ひろい庭への小道へ入って行った。柿の実がたくさん落ちていて、足の下でいやな音をたててつぶれた。小屋の入口がそこにあった。バケツや薪やかまどや、いろんながらくたが入口の壁によせかけてあった。

小屋のなかは、真暗だったが、旅館の灯が、ここまで射し込んでいた。そのなかで、僕は、白い襦袢と腰巻の女が、竹で先刻の少年を打ちすえているのをはっきり見た。女は、一層乱髪となり、相変らず壁のような艶のない白い顔をしていた。僕は、警察の拷問で竹刀で十分に打据えられたことはあったが、子供に対する折檻で、こんなひどい折檻を見たことはなかった。少年は、土間へ横にころがりながら、裸の脚をちぢめ、腕で頭を蔽っているのだった。そして、たしかに酔っているらしい女は、木箱の上にだらしなく腰を下して、かなり太い竹で勢よくその少年を打ちすえるのだ。そのたび女の身体は、ゆらりとゆらぎ、少年は、犬のようならうな声あげた。女は、その苦しそうな少年を見据えながら、男のような声でいった。

「今日は許さない！　どんなことがあっても許さない！　百まで許さない！」

女は、一つ打つたびに、大儀そうに息をついた。誰かが向うの小道から歩いて来た。農夫だった。彼は、僕の立っているのを見ると、自分も近寄って、同じように小屋のなかをのぞいたが、すぐ興味もなさそうに離れると、僕へ教えるようにいった。

「いつものことで、あれは芝居ですよ。子供が盗みをする、ああやって子供をいじめて、さかさまにみんなの同情をひこうとするんですよ。何しろあの子供はね、山西屋の新家で貸さないというのに、つくったばかりの新しいたら、いを一寸の間にだまって持ち出していったというんですからね。こんど生れる長男の産湯につかうつもりでこしらえたたら、いをですよ。油断もすきもならない……」それから僕へ、同情するようにいった。「汽車のお客さんですかい？　……ひどい目に会いましたなあ。水も大分ひきましたから、すぐ

開通するでしよう」

そのまま農夫は立去って行った。しかしその間にも、子供に対する折檻はつづいていた。女は、喘ぐように叫んで竹を振り上げた。

「五十九！」

手がくたびれてしまったらしく、竹が少年の身体に当たると、彼女の手からはなれてとんだ。しかし女は、じっとしていた。やがて、嘆くように呟いた。

「どうしたらいいんだろう。どうしたら……」

僕は、小屋のなかへ入って行き、その竹をひろい上げた。

「子供をうつのはよくないですよ」

だが、女は、たわ言のようにぼんやり繰り返した。

「どうしたら。……ほんとにどうしたら……」

少年は、のろろと立上った。少しよろめいた。僕は、その少年を見た。半袖のシャツはひどいぼろで、肩のあたりが紫色に腫れあがったまま、まる見えとなっていた。眼が、昼間見たときより一層深くくぼんでいたが、澄んだ大きな眼をしていた。なかなかの好男子であった。だが、頬のあたりは、土間の土でよごれて、顎の下からは血が流れていた。手で眼をぬぐったので、泣いていたことが判った。僕は、その少年にいった。

「なぐられそうになったら逃げ出すんだよ。弁解も何もしないで逃げ出すんだよ」

しかし少年は答えなかった。その態度には、他人の言葉に対するひややかな無関心が感じられた。少年は、しばらく腕のあたりをさすっていたが、もう用がすんだというように、そのまま表に出て行こうとした。す